

## シンポジウム 2：臨床検査技師の大学院教育を考える：現役大学院生からのメッセージ

## 5. 医療現場から教育現場へそして社会人大大学院生となって

中村 泰子\*

[Key Words] チーム医療、資格、超音波検査、社会人大大学院生

昭和 33 年 4 月、「衛生検査技師法」が制定され、昭和 45 年 5 月、臨床検査技師とは厚生労働大臣の免許を受けて、臨床検査技師の名称を用いて医師の指導監督の下に微生物学的検査、血清学的検査、血液学的検査、病理学的検査、寄生虫学的検査、生化学的検査および生理学的検査を行うことを業とする者であることが定められた「臨床検査技師、衛生検査技師等に関する法律」と法律は改められ、臨床検査技師が世に出た。そして平成 26 年厚生労働省が発表した平成 26 年(2014)医療施設(静態・動態)調査・病院報告の概況では医療関係に従事している臨床検査技師は 64,080 人であると報告されている。昭和 45 年の法律改正以降、「臨床検査技師、衛生検査技師等に関する法律」は平成 17 年には「臨床検査技師等に関する法律」と改正され、それまでの「医師の指導監督の下」から「医師又は歯科医師の指示」に改められ、また衛生検査技師の免許は平成 18 年 4 月からは廃止されることになった。そして、最近では平成 26 年 6 月にも法律は一部改正され、5 つの検体採取と生理学的検査で臨床検査技師の業務に新たに追加されている。臨床検査技師が誕生した昭和 45 年からこれまで、臨床検査技師の業務内容、医療の中での立場は変わってきた。私は平成 2 年に臨床検査技師の資格を取得し、平成 23 年 3

月まで医療現場で臨床検査技師として勤務し、その後、縁あり臨床検査技師教育に携わることになり、現在、教鞭をとりながら自己研鑽のため大学院で学んでいる。医療現場から教育現場へ、これまで様々な人と出会い、経験を積んできたが、社会人大大学院生の目を通してこれまでを振り返り、そしてこれからの教育を考えたいと思う。

## I. 病院勤務時代

平成 2 年 3 月、私は高知学園短期大学衛生技術科を卒業し、中村市立中村市民病院(現・四万十市立四万十市民病院)に入職し、臨床検査技師としてスタートした。2 年後、退職し、高知県職員となり、県立宿毛病院、県立中央病院を経て、平成 17 年 3 月、高知市立市民病院と高知県立中央病院の統合病院である高知県・高知市病院企業団立高知医療センター(以下、高知医療センター)設立に伴い異動し、平成 23 年 3 月まで勤務した。

平成 2 年から平成 23 年まで医療現場で臨床検査技師として働いてきたが、20 年の間、様々なことが大きく変化した。平成 2 年、就職した当時でも生化学検査、血液検査などは機械化が進んでいたが、その中、ベテラン技師の方々が「昔は検査はすべて用手法で試薬も技師が作製することもあり大変だった」と昔を懐かしみながらそして技

\*高知学園短期大学医療衛生学科医療検査専攻 ynakamura@kochi-gc.ac.jp

術者としての誇りを横顔に見せながら言われていたのを思い出す。現在、医療現場では電子カルテ化が進み、医師や病院職員はパソコンに向かう時間が増え、各種マニュアルの作成、実施、医療ミスを防ぐためのインシデント、アクシデント報告、高度化する医療への対応、他、院内感染対策など臨床検査技師も技術だけでなく、他の仕事が増え、日々忙しく働いている。

また臨床検査技師は就職した当時は3年制卒が多く、私の周囲には4年制大学出身者は極少数いたが薬学部出身で、ほとんどの臨床検査技師は短大、専門学校出身者であり、大学院を修了した者はいなかった。

## II. 資格取得

短大進学にあたり、私は一つ決めていたことがあり、通信4年制大学で学び学士を取得することを目標としていた。就職後、首都圏にある通信4年制大学に入学し、働きながら通信教育やスクーリングを受けていたが、医療現場で働くにつれ、学歴より患者、臨床に役立つ資格を取得することに方向転換をし、学士取得まで至らなかった。当時はわからなかったが今思うと学士取得まで至らなかったことが惜しい。

臨床検査技師の業務内容が生理検査領域で広がり、当時勤務していた県立中央病院でも統合病院である高知医療センター設立をきっかけに多忙な医師の代わりに超音波検査を臨床検査技師が担う方向になり、超音波検査担当になった私は平成16年に超音波検査士(消化器領域)、平成17年に超音波検査士(循環器領域)、平成21年に超音波検査士(体表臓器領域)を取得し、超音波検査業務に励んだ。他、平成19年に健康食品管理士を、平成25年には認定心電検査技師を取得し、これら資格は学歴とは関係ないが、この臨床経験を元に今後、臨床検査技師教育に励んでいきたいと考えている。

## III. 統合病院

経営状況が悪化している公立病院は多い。高知県内の公立病院も同様で高知県と高知市は公立病

院の赤字運営改善策の一つとして公立病院を統合させた。これまで高知県では2つの統合病院が設立された。そしてこの2つの統合病院設立に私は少しであるが関わり、振り返ると臨床検査技師でこの2度の統合病院設立を体験した技師は私しかいない。1度目は高知県立宿毛病院と高知県立西南病院の2つの県立病院の統合病院である県立幡多けんみん病院の設立、そして2度目は高知市立市民病院と高知県立中央病院の市立病院と県立病院の統合病院である高知医療センターの設立である。市立病院と県立病院の統合は全国初で全国ニュースでも取り上げられていた。統合病院設立に伴い、新病院では医療機器も新しくなりハード面は良くなったが、職員には厳しいものがあつた。特に臨床検査技師は統合病院では新病院開院とともにブランチャボが導入され、血液、生化学、免疫、細菌など多くの検体検査担当の臨床検査技師は病理検査を除いて携わることがなくなり、それまで両病院にいた臨床検査技師の半数以上が事務職への職種転換を余儀なくされた。私は学生時代、高知県内で活躍する臨床検査技師が多く所属していた県立中央病院で働くのが夢で県立中央病院勤務が決まった時はとても嬉しく思ったことを覚えているが、尊敬していた技師の先輩方が統合病院設立をきっかけに職種転換や退職されることになり、これは高知県にとって大きな損失ではなかったかと今でも思う。「血液検査は〇〇技師」と言われていた県内でも名が知れ渡っていた臨床検査技師の先輩もこの時退職された。

私は2度の統合病院設立に関わり、臨床検査技師の臨床での立場の弱さを痛感した。決してブランチャボが悪いわけではない。これは世の流れで、社会的にブランチャボが果たす役割は大きいと思う。ただ、ブランチャボ導入のため、それまでいた臨床検査技師の半数以上が職種転換や退職をしてしまったことは臨床経験が生かされる職業だけに残念なことであつた。

この臨床検査技師の立場の弱さを感じる原因は何か、4年制大学や大学院で深く学び、そして探求心ある自立した研究者に成長した臨床検査技師が医療現場に多くいたら状況は変わっていたかも

しれない。

#### IV. 転職・大学院

私は縁あって、平成23年、母校である高知学園短期大学の教員となった。学科の名称は衛生技術科から医療衛生学科医療検査専攻と変わり、授業内容はプレゼンテーションやコミュニケーションに重きを置いたものもみられ、私の学生時代と大きく変化しており驚いた。就職したばかりの頃と違い、臨床検査技師養成校は4年制化が進み、一方で3年制は減少し、現在では4年制が3年制を学校数で上回っている。そして4年制を卒業した一部の学生は大学院に進学していることを知り、さらに驚いた。周囲がこのように大きく変化し、母校も変わるのも当然である。本校は3年制であるが、その上に専攻科応用生命科学専攻があり1年間の研究を終え、学士を取得することができる。また、本校でも専攻科修了後、大学院に進学する学生もいる。

私は病院勤務時代は資格や技術を高めることを優先し、患者のために働く気持ちで満足し、大学院を身近に感じたことがなかったが、教員に転職後、大きく変化した教育現場を目の当たりにして自己研鑽の必要性を感じ、また周囲のアドバイスそして社会人入学が認められたことで平成23年4月、高知大学大学院総合人間自然科学研究科医科学専攻に入学した。転職と同時に社会人大学院生となり、現在、修士課程を終え、博士課程で学んでいる。転職以来、これまでずっと仕事後に大学院でのセミナー受講、そして研究・分析する毎日である。

#### V. 大学院での学びの意義

昭和33年「衛生検査技師法」が制定され、法律は昭和45年に「臨床検査技師、衛生検査技師等に関する法律」と改められ、それまでの検体検査業務に加えて生理学的検査と採血を行うことを業とする臨床検査技師が世に出た。また、平成17年には「臨床検査技師等に関する法律」と改められ、それまで臨床検査技師は「医師の指導監督の下」から「医師又は歯科医師の指示の下」に

検査業務を行うこととなり、衛生検査技師制度は廃止された。そして平成26年には法律が一部改正され、検体採取と生理学的検査で業務追加があり、臨床検査技師の業務拡大がなされている。

臨床検査技師教育は衛生検査技師教育から始まった。昭和33年「衛生検査技師法」が制定され、衛生検査技師学校養成所指定規則により2年の教育期間、総時間数2,340時間で行われるようになり、衛生検査技師免許は都道府県知事免許であった。臨床検査技師が世に出た昭和45年の法律改正後、学校教育は3年制になり、また厚生大臣免許となり臨床検査技師は国家資格となった。その後、指定規則・指導要領の改訂が行われ、教育現場では3年制から4年制教育に移行する大学が増え、さらに大学院博士課程前期・後期を設置する大学もみられ、今や大学院を修了した臨床検査技師は珍しくない。

医療現場での臨床検査技師も法律の改正とともに技師に対する認識がパラメディカル(医師の業務を補佐する医療専門職)からコメディカル(医師とともに医療を提供する医療専門職種の総称)、そして今はチーム医療の一員であると変化してきた。

昭和33年の「衛生検査技師法」制定後、60年程経つが、法律、教育、医療現場それぞれに変化がみられた。それは医療の高度化・複雑化・医療従事者の業務増大が背景にあるのは周知のごとくである。

私は長く医療現場にいたが、この間、医療現場での臨床検査技師の立場の変化は感じていた。20数年前、就職した頃、職場で看護師から「検査さんだから・・・」と言われたことを覚えている。それは「臨床検査技師だから患者のことはわからないだろう」というやや非難めいた言葉で、当時の検査室の問題点としても他部署とのコミュニケーション不足が問われており、臨床検査技師も検査するばかりではいけないという風なことが技師間でも言われていた。その後、医師を除く医療職は「パラメディカル」から「コメディカル」と呼ばれ始め、そして「医療はチーム医療で」と変化する中、臨床検査技師も病棟へ、外来へと活動範囲

を広げ始め、臨床検査技師も他部署、多職種と患者情報を共有しながら、患者を支えるチームの一員となっている。

医療現場にいる者は皆、患者のためにと日夜、仕事に励んでおり、またそれぞれの専門の認定資格取得のために多くの医療技術者が自己研鑽に励んでいる。私も資格を取得してきたが、現場にいるとき「大学院で学ぶ」ことは、敷居が高く感じ、学べたらいいな、という程度で、現実的には結び付かなかった。それより専門知識が深まる資格取得に関心があり、このことは他の医療技術者でも同様に感じている人も多いと思う。

しかし、2つの統合病院設立で職種転換していた臨床検査技師の姿を見て、技師の立場の弱さを感じた。もし、大学院を修了した臨床検査技師がそのとき現場に多くいたら、どうなっていたらだろうか。

私は社会人大学院生として学び始め、それまで「井の中の蛙」であった自分に大いに反省した。大学院は物事を理論的に考え、探求する目を養う自立した研究者を育てる場所で修士課程での基礎、専門分野での学びは私の物事に対する視野を広げ、「姿勢」を変えた。

こういったことを学生時代に学んでおれば、様々な場面で積極的な行動ができたこともあったのではないだろうか。それは臨床検査に対する新しい発想、新しい展開が期待され、また、学会発表や論文作成も積極的になり、これらは他医療職種との新しい関係を生むかもしれないし、チーム医療の中でも活躍する多くの臨床検査技師が現れるかもしれない。私も早く大学院で学んでおれば、臨床時代、検査結果や検査業務に対する様々な「気づき」が多くあったかもしれないし、検査してきた多くの貴重な症例を積極的に学会報告し、医療にもう少し貢献できたと思う。

## VI. 大学院に求めること

最近、社会人に対して大学院は広く門戸を開放しており、私も入学できたが、社会人でも大学院で学べることをもう少し宣伝していただければと思う。私は転職を機に周囲の先生方から大学院の

情報を得たが、臨床時代は情報の少なさと大学院に対して敷居の高さを感じ、大学院受験までは至らなかった。医療現場には「学び」に関心がある人が多く、社会人でも学び、研究ができることを知れば、入学者も増加するだろう。

病院勤務時代、他医療施設の臨床検査技師から4年制卒の新人についていろいろ話を聞くことがあった。高知県内で働く臨床検査技師の多くが高知学園短期大学の卒業生である。本校は約3ヶ月半、臨地実習があり、全部門でないが臨地実習前には高知県臨床検査技師会の協力を得て、現場の臨床検査技師を迎え、学内で直接、実習指導を受けるなど実習には力を入れている。地元の臨床検査技師が、一部の4年制卒の新人の学生時代の実習内容を聞いて驚いていることがある。新人技師に肺活量の検査をお願いしたら「学生時代に肺活量の実習をしていないので肺活量の検査ができません」と新人技師から言われたとか、学生時代に採血実習をしていないこと、また、就職してしばらく経つのに心電図が読めないことなど、戦力になるまで時間がかかると嘆いていることがある。採血では患者から苦情があったらしい。

これは4年制卒の学生のエピソードであるが大学院修了した学生にもあてはまることもあると思われる。大学院修了後は医療関係だけでなく、研究職、一般企業など活躍の場は広がると思うが、特に将来、医療現場を希望する大学院生にはさらに臨床の知識と技術を身につける機会が学生時代にあればと思う。

## VII. 大学院修了後

現在、私は高知大学大学院総合人間自然科学研究科医学専攻(博士課程)3年に在学しており、「若年女性の骨密度と内臓脂肪の関係」をテーマに超音波診断装置を用い研究している。大学院修了後は医療現場とのつながりをもちながら、人の健康増進に役立つ地域活動や研究を行っていきたいと考えている。そして、臨床経験を生かし、また新たに大学院で得た知識を加えながら学生に向き合っていきたいと思う。

最後なるが、常に私の心の中にはある患者の言

葉が残っている。「次もあなたに検査をお願いしたい・・・。」その患者は癌の再発がないか定期的に検査にいられていた方だったが、しっかりとと言われたその言葉に身が引き締まる思いがした。社会人大学院生となって、物事に対する見方、考え方、分析など視野が広がった。「知」の力は大き

く、それは臨床検査技師の地位向上に大いにつながり、これからもそういった技師を増やさなければいけないと思うが、そこには常に私たちの仕事は「人ありき」、「患者ありき」であることは忘れてはいけないと思う。